

あっという間に今年も師走がやってきました。12月の音楽的恒例行事には、ベートーヴェンの第9の演奏がありますね。暮れに第9を演奏したり、1000人もの合唱団で「喜びの歌」を歌うのは、日本独特のようで、欧米では、年末に集中して第9を演奏することはないようです。「喜びの歌」の歌詞は、世界平和を願い、みなが兄弟になろうというものですので、ベートーヴェンの力強いメッセージをみんなで共有しようという試みは、音楽の醍醐味と言えますね。ヨーロッパ、特にウィーンでは年末の恒例音楽は、ヨハン・シュトラウスのオペレッタ「こうもり」です。「こうもり」は、楽しく、ユーモアに満ちた大晦日の夜を舞台にした嬉歌劇で、日本とは対照的に、恋をして、踊って、ワインを飲んで楽しく過ごすという華やかで遊び心に満ちています。

このような日本や欧米の風習をその季節ごとに楽しみながら、ピアノの曲を選んでみてはどうでしょうか？ピアノは、10本の指を使って、オーケストラと同じ音域を自由に弾くことができますので、先に紹介した、第9の「喜びの歌」やこうもりの序曲などが、ピアノの楽譜として出版されています。また、演奏技術にあわせて、初級から上級まで上手く編曲された楽譜があります。また、連弾という方法もあり、おばあちゃまとお孫さん、お母様と子どもさんなど、演奏技術のレベルが違ってても、一緒に家族で楽しむこともできます。

11月にピアノを弾くことは、体幹を鍛え、脳の活性化になり健康になるとお話しましたが、それだけではなく、世界の季節ごとの行事に合わせた音楽をさまざまなお国柄とともに感じたり、その音楽が生まれた背景や作曲家のことを調べたりすることで、教養の幅が広がります。ピアノを弾くときに、曲の背景や作曲家の人生なども一緒に勉強すると、その曲にも愛着がわいて、演奏の上達に繋がるのです。

例えば、ベートーヴェンの「エリーゼのために」を弾こうとする時、エリーゼって誰だろう・・・と思うだけで、昔、ベートーヴェンが恋をした、テレーゼ・マルファッティ男爵夫人に捧げたいというエピソードが発見できます。作曲年は、1810年で、ベートーヴェンが40歳のころとわかるだけで、この曲に親近感がわくのではないのでしょうか。

平成最後の年末、みなさま、どうぞよいお年をお迎え下さい。